

ドイツ語教科教育法

—「言語類型論」にもとづいた「格アレルギー」解消の試み—

法学部 吉田 和比古

A Methodological Research on the Teaching German
—How can I let the Students get over ‘Case-Allergy’?—

Kazuhiko YOSHIDA (Faculty of Law)

For the most students who begin to learn German as a second foreign language at any universities, it is very difficult to understand and learn a so-called ‘Case-System of German’, because it seems to be apparently very complexive. Indeed it is not so easy to acquire such kind of ‘case system’ especially for the students who have already begun to learn English since their junior high school days. Because a case system as a morphology in English has vanished for thousand years ago. Therefore German seems to be a quite different language from English. But German is not only the case which possesses a complexive case system as a grammatical structure. In this sense, it is very important for teaching German, not only how to motivate students, but also to develop a method for language teaching. This paper is a kind of case study or ‘recipe’ for the students to get over ‘Case-Allergy’ somehow. Such a case is sometimes very serious. So I devote this paper to all German lecturers who are suffering in a classroom with so many students. My method is also based upon a linguistic typological theory and the Case Grammar.

Key words: Case-Allergy, Preposition and postposition, Universality of word order, Mirror image of a language, Semantic case role.

はじめに

大学の教養教育における「初級ドイツ語」の授業については、当該教師の教育理念によって、さまざまな具体的目標や到達度の設定が可能である。たとえば、主としてそうした授業方針を文献の読解力の養成におくとした場合、さらには、ある程度までの発信性を備えた表現力の涵養におくとした場合、いずれの場合においても、伝達単位としての文を組み立てる基本的な文法知識の習得はどうしても最小限度不可欠である。そこで、大半の授業においてはマニュアル的な市販の教科書を用いて授業を行うわけであるが、それらの多くは、文法の項目別に配列されていて、それにしたがって授業をすすめていくことになる。そして一年間の学習をкаろうじて終えた学生の大半の感想はと言うとドイツ語の文法がややこしい／面倒臭い／複雑すぎる／

覚えきれない—などなどである。

これも、一面においては当然の結果である。ことさらにドイツ語学習に積極的なモチベーションを持たず、数年間はまがりなりにも英語学習に慣れ親しんできた学生にとっては、ドイツ語の教科書に並べられている各種の変化表を見たときにうんざりするに違いないのであって、この場合学ぶ側の学生の知的能力や資質に欠陥があるというように単純に結論づけるわけにはいかない。

そこで問題となるのは、その教え方〔方法論〕であり、しかもその方法論は学生の知的関心を可能な限り刺激するようなものでなくてはならない。当該の変化表を、ここで主として扱うのはドイツ語の名詞の格変化についてであるが、ただ頭ごなしに覚えるようにと言ってしまうのは簡単であるが、それは単なる「詰め込み」であり、もしそれで良しとするならば実はドイ

ツ語教師としては、自ら失格宣言をしているようなものである。言い換えると、教科書に書いてあるとおりの項目を覚えろというだけでは、何も教えたことにならないのであって、もし教えたつもりでいるとするならば、それは教師の単なる自己満足に過ぎない。しかしそれが過去一世紀以上も踏襲され続け、しかも今なおそうした詰め込み的教え方が、たとえて言えばシーラカンスのように生きた化石として大学教育の中で平然とまかり通っている現実をかいま見るとぞっとする思いにかられる。

ドイツ語を料理の素材になぞらえるならば、それをいかにして食わず嫌いにせず、とにかくいかに美味しく食べてもらうか、そして十分味わってもらうか—それが「料理人ドイツ語教師」の腕の振るいどころになるだろう。もちろん消化不良をおこさせないの言うまでもないことであるが。もっとも、料理の達人がこの世に存在するのと同様に、語学教育の達人になるのはやはり至難の技である。一方が、人間の味覚と視覚を刺激するように、他方で人間の知的好奇心を刺激するということはやはり同レベルではありえないのだから。それでも、やはりドイツ語教師として自分の作るメニューに工夫を重ね、ドイツ語を少しでも「美味しい」ものにしていかなければならない。

以下に述べるのは、初級ドイツ語の学習における、最初の大きなハードル〔障害物〕とでも言うべき「ドイツ語名詞の格変化」について、筆者がどのように授業のなかで導入しているかということについての「モデル」の紹介である。それが、ドイツ語を教える教師の誰にとっても有効な「レシピ」となるかどうかは断言できないが、語学授業にとって言語学的知識がかなり深みのある隠し味になりうるということについて、筆者は多少の自信を持っている。¹⁾

1. 「格アレルギー」解消のために～格の理解のための「言語類型論」の基礎知識の導入～

新学期を迎え、聴講のための手続きも終えて、いよいよ教科書を広げて授業が開始される。当然ながら外国語の学習は、その言語特有の「表記文字」の習得と

「発音」の練習から始まる。ドイツ語はほぼローマ字どおりに発音するというあたりは、発音と綴りがいつも1対1に対応しない英語の綴りのシステムよりは比較的スムーズに授業が進行するのであるが、次の課で「動詞の人称変化」に移行すると少し複雑さが出てきて、さらに次の課で名詞に性別があるというあたりから、やはりドイツ語は「噂のとおり」にむずかしそうであるという言い知れぬ不安が、初学者の胸の中で日本海の灰色の雲のようにじわじわと湧き出して来る。そして、次の課でおもむろに「名詞の格変化」が現れて、一見してややこしそうなくつかの表がだしぬけに学生の視野に飛び込んでくるあたりから、いよいよ眩暈（めまい）が生じてくる。いわゆる「格アレルギー症候群」の始まりである。はたしてドイツ語の「格のシステム」は本当に複雑怪奇で、ドイツ語を学ぶことは大学に入ってから初めてというほとんどの日本の学生になじみにくいものなのか。いや、じつはそんなことはない。人間の言葉というのは、それほどでんばらばらではない。心理的距離感はともかくも、ドイツ語は学生の母語である日本語とはかなりの共通性を持っているということ、格の現れ方は個別言語においては相対的な差異を生じるが、根底の部分ではコミュニケーション手段として、多くの言語に見られるものであるという認識をここでしっかり植えつけておかなければならないのである。そのためにも筆者は「言語類型論」的な基本知識をここで導入し、ドイツ語の格の現象が特殊なものではないということや「格アレルギー」解消のために少し「回り道」にはなるけれども、以下のような基本情報を学生に提供することによって、単なる暗記項目としてではなく、まがりなりにも学生としての年齢に充分対応できるような知的充足感を与える工夫を行っている。

ドイツ語の「冠詞〔不定冠詞および定冠詞〕」の表が次のように教科書に提示されていてそれを無理やり暗記するようにと授業をすすめるドイツ語教師はおそろしくないはずで、それぞれに何らかの導入を教授法的に考えるはずである。そこで説明のポイントとしてはまず始めに、例えば定冠詞において英語ならばtheのひとつだけですんでいるところがドイツ語では、名詞の性別／単数・複数そして「1格・2格・3格・4格」

	<i>m.</i>	<i>f.</i>	<i>n.</i>	<i>pl.</i>
	父	母	子ども	人々
1格〔主格〕	<i>der</i> Vater	<i>die</i> Mutter	<i>das</i> Kind	<i>die</i> Leute
2格〔属格〕	<i>des</i> Vater-s	<i>der</i> Mutter	<i>des</i> Kind-es	<i>der</i> Leute
3格〔与格〕	<i>dem</i> Vater	<i>der</i> Mutter	<i>dem</i> Kind	<i>den</i> Leute-n
4格〔对格〕	<i>den</i> Vater	<i>die</i> Mutter	<i>das</i> Kind	<i>die</i> Leute

と変化するという点になってくる。ちなみに、一般的に教科書では、1～4格のように数字で表記される場合(case)が多いが、初学者にとって基本的な意味の理解を助けるために「主格・属格・与格・对格」という名称を併記すべきであると考えられる。

上の変化表は、ここで形式的に英語と対応させてみると以下ようになる。

<i>the</i> father	<i>the</i> mother	
<i>of the</i> father	<i>of the</i> mother	〔略〕
<i>to the</i> father	<i>to the</i> mother	
<i>the</i> father	<i>the</i> mother	

このように二つの言語を比較してみると、大半の学生にとって、英語では*the*という定冠詞一つですむのに、なぜドイツ語ではこれほどまでに定冠詞の数と種類が多いのかという素朴な疑問が生じてくる。結論的には、英語の(1)歴史的変遷の経緯と(2)「前置詞機能」が「冠詞による格機能」にとって代わったということの説明すればよいのであるが、この説明もある程度の子備知識の導入が必要となるので、もう少し後で説明が行われる。

また、英語・ドイツ語という兄弟言語に加えて、母語としての日本語も含めて比較対照することによって言語における「格」の機能ということの理解がより容易となるだろう。そこで、方法論として類型論的にみた日本語とドイツ語・英語の違いについて話をすすめる。ここが格の理解のための重要な導入部分となる。

2. 言語の「類型」あるいは「タイポロジー」

〔以下では、授業における言述の部分は「デス・マス体」で表し、段落を「 」でくくることにする〕

「人間の話す言葉には、いろいろなタイプがあります。そのタイプのことを以下では「類型」とも言うことにします。そうした言語の「類型」というのはどう

いうふうに区別するかと言いますと、一般に主語〔以下Sと略記〕動詞〔Vと略記〕そして目的語〔Oと略記〕が叙述文でどのように配列されるかということ、簡単に言いますと「誰ガ 何ヲ ドウスル」という伝達単位としての「文」があるまとまった情報を伝える際のS・V・Oという三つの要素の並び方をもとにしています。この並び方を一つの基準にして言語の分類をすることができます。

〔設問1〕

「たとえば、SとVとOという三つの要素の数学的な並べ方は何通りありますか〔この単純な設問に一人の学生に答えさせる〕結果的には、次の6とおりの並べ方が考えられます。^{2)〕}

- | | |
|----------|----------|
| 1. S V O | 4. V O S |
| 2. S O V | 5. O V S |
| 3. V S O | 6. O S V |

学習がさらに進んだ段階では、ドイツ語では上の基本語順の中で、1/2/3/5が許容される事実を説明する。^{3)〕}

「皆さんがよく御存知のように今まで学習してきた英語はSVO、漢文として学んだ中国語はSVO、そして英語の兄弟語であるドイツ語もSVOということで、皆さんが日頃よく目にしたり耳にしたりする外国語のほとんどはSVOというタイプに属しているという印象を受けます。そして我が日本語は先程も言いましたように「誰ガ 何ヲ ドウスル」ですから、SOVタイプに属します。ついでに言いますと、昔の日本人は当時の文化先進国であった中国から「漢字」を輸入したときに、漢字で成立している漢文を日本語の語順に置き換えて読むために「返り点(レ点)」を発明しました。二つの言語では、基本的な語順が違っているということ、つまり文末にVが来るか来ないかという違いを直観的に理解していたんですね。このレ点こそは日本人独自の重要な発明品の一つだと思います。

このように見てくると、世界に3,000とも5,000とも
言われる様々な言語が存在する中で、いったいどの
タイプの言語が多いのかということも考えてみたいと
ころです。ついでに皆さんに一つ質問してみたいと
思います。

〔設問2〕

世界の言語の中で、SVO言語とSOV言語とど
ちが多いと思いますか。一多いと思う方に手を上
げてください。最初にSVOが多いと思う人は？。

この時の学生の反応については、説明の流れから
して当然のようにSVO言語が多いという判断がほ
ぼ90%以上となる。つまり、この段階で日本語
のようなSOV言語がマイナー（少数）であるか
も知れないという予測を一応学生に抱かせておく。

「皆さんの予想は残念ながらほとんど外れてしま
いました。最近の研究者が世界の言語を約2,000
調査してみたその結果、いちばん多いのが日本語
のようなSOV言語で約48%、その次がSVO
言語で約36%だそうです。³⁾結果的に約9割の
言語が、SOV/SVOのどちらかということ
になります。この二つのタイプに共通点として、
文の最初にS〔主語〕が立てられるということ
にひとまず注目しておいてください。ついでに
言いますと、現在の英語・ドイツ語の祖先語でも
ある「インド＝ヨーロッパ語族」も、日本語の
ようなSOV言語であったということは興味深い
ことではないでしょうか。この「インド＝ヨー
ロッパ語族」には、仏典などが書かれた古代
インドのサンスクリット語なども含まれていま
す。

さらに、研究者の中には、ドイツ語の表層に
おける基本語順はたしかにSVOではあるが、
その深い構造の中では、ドイツ語の基本的な
語順は動詞的要素を（日本語のように）文末
に置いたものと仮定することも可能ではな
いだろうかと思唱する人もおられます。参
考に申しますと子供の言語習得の研究にお
いては、次のような事例も報告されています。

ドイツの子供が、話し始め（言語習得の開始）
の頃は、

Mutti Buch liest
ママガ 本ヲ 読ンデイル

というように、日本語の語順のように動詞を
文末に置

いた文を使うことがあるという報告などは、
我々にとっても興味深い事実です。つまり、
個別言語は現象面において多様性をみせま
すが、その深い部分においては「人間の
コトバ」という点において、何か「通底」
している普遍的（universal）な要因が
潜んでいるようにも思われます。」

3. 日本語の「格」とドイツ語の「格」

「それでは、言葉にとって「格」とは何か
について話をすすめてまいりましょう。はじめ
に次のパターンを見てください。

設問文： 父＋□ 私＋□ お金＋□ V

このパターンを見ますと何か漠然とある意味
が想像できないでしょうか。」

この文型において3つの名詞「父／私／お
金」は、それぞれにまだ文の中で「意味役割
（semantic role）」が付与されていない。
もちろん学生は直観的に、□を埋めること
によって、あるまとまった意味を持つ文を
作成することができる。

〔設問3〕

「それでは上の設問文の□に適切な「何
か」を埋めることによって意味のある文に
してください。なお、Vには適切な動詞を
選択してみてください。」⁴⁾

〔解答例〕

父＋ガ 私＋ニ お金＋ヲ クレタ／ヨコシタ。
父＋ガ 私＋ニ お金＋ヲ セビッタ。
父＋ガ 私＋ヲ お金＋ニ カエタ。
父＋ガ 私＋カラ お金＋ヲ トリアゲタ。
父＋ニ 私＋ハ お金＋ヲ ワタシタ／アズケタ。
父＋カラ 私＋ハ お金＋ヲ マキアゲタ／モラッタ。
父＋モ 私＋モ お金＋ガ スキデアル。
父＋ト 私＋ハ お金＋ニ マドワサレタ。
父＋ヲ 私＋ハ お金＋デ ……

いくつか代表的な例をここに上げたが、
この練習は、日本語において名詞に対する
文の意味付与がいわゆる「格助詞」によ
って行われていること再確認するため
のものである。具体的には、次のような
項目の確認作業である。

[1]設問文だけみてもある種の意味関係が、頭の中で成立しているということ。つまり「父／私／お金」という3つの名詞の間に生じうる有意味 (relevant) な関係性が「発話」される前に、あらかじめ頭の中で何通りか想定されているということの理解。

[2]「助詞」を付与することによって、初めてそれぞれの名詞が文という伝達単位の中である意味役割を担うということの再確認。

[3]最初の名詞 (NP₁)「父」が、S〔動作主体〕として比較的立ち上がりやすいかも知れないこと。

[4][3]とは反対に、最初の名詞「父」が、必ずしも「主語」とはならないこともあるということ。したがって最初の名詞 (NP₁) の意味は、談話・文脈依存的であることへの理解。

「あたりまえのようですが、日本語ではそれぞれの名詞の後にいわゆる「格助詞」を付与することによって、それぞれの名詞の文の中での役割あるいは資格すなわち主語としての資格、目的語としての資格が明示されることとなります。格助詞の格とはこの資格の格ということの意味しているわけです。なお最近では日本語の助詞が前置詞と同じレベルで扱われることを示すかのように「後置詞 (post-position)」と呼ばれることもあるということを頭に入れておいてください。これと同じ原理で、ドイツ語では名詞の前に冠詞を置くことによって、Vaterの役割が明示的になります。すなわちder Vaterという名詞は「ガ+父」と並べられているというように便宜的に考えられます。同じよう

にしてdes Vater-sは「ノ+父」、dem Vaterは「ニ+父」、den Vaterは「ヲ+父」というようにイメージしておきましょう。ついでにドイツ語では定冠詞の形がすべて違っているのは男性名詞だけであって、女性名詞・中性名詞・複数名詞は主語の形と目的語の形が、それぞれ同じですからそれほど記憶の負担にはならないと思います。

以上の説明をもう一度まとめてみますと次のように言えるかと思えます。

「格 (der Kasus, the case)」というのは、文を構成するそれぞれの名詞がもつ文法上の役割 (例えば：主語・目的語など) の総称です。そして、その実現の仕方は個別言語により違いが見られますが、格表示の体系は、大きく分けて次の二つが挙げられます。

◎平板 (フラット) なシステム：日本語、トルコ語など [主にSOV言語]⁵⁾

統語構造上の特徴→「助詞」などの特定数の「後置詞 (post-position)」をもつ。

◎階層 [ヒエラルヒー (die Hierarchie)] をもつシステム：英・独語など [主にSVO言語]

ここで言う「階層」とは、名詞が冠詞だけで意味役割が明示される場合と、前置詞+冠詞によって明示される場合とで二重構造になっていることを言います。視覚的理解のために下の図を参照してください。ついでに、ドイツ語と英語と比較して異なっている点はどこか調べてみてください。なお、冠詞が () 付きなのは、選択的であることを示します。

日本語・ドイツ語・英語における「格のシステム」の比較・対照

日本語		ドイツ語	英語
名詞+ガ 名詞+ノ 名詞+ニ 名詞+ヲ	基本的意味役割 動作主体 所有主体 利害主体 対象物	1 格 (冠詞) + 名詞 2 格 (冠詞) + 名詞 3 格 (冠詞) + 名詞 4 格 (冠詞) + 名詞	(冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 (冠詞) + 名詞
名詞+ヘ 名詞+デ 名詞+ト 名詞+カラ 名詞+ヨリ	階層構造 (二重構造) 到達点 存在点 並列主体 起点/原因 起点/原因	前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞	前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞 前置詞 + (冠詞) + 名詞

ルマン語として出発しており、この英語における大きな変革は一つの関心事として取り上げる価値がある。これは視聴覚資料を用いて補足的に授業で行うのであるが、今回の論考では紙数の都合で取り上げない。

ド イ ツ 語 英 語

1 格 (冠詞) + 名詞	(冠詞) + 名詞
2 格 (冠詞) + 名詞	前置詞 + (冠詞) + 名詞
3 格 (冠詞) + 名詞	前置詞 + (冠詞) + 名詞
4 格 (冠詞) + 名詞	(冠詞) + 名詞

「ある意味では、日本語は「ガ・ノ・ニ・ヲ・ヘ・デ・ト・カラ・ヨリ」と9格言語と便宜的に考えることも可能であって、この格の数はそれぞれの言語によって異なります。ラテン語は6格言語です。格の数の多い言語としては、フィンランド語やエストニア語があげられます。次に紹介する表を見ながら、いちど皆さんで格変化を発音してみましょう。

「フィンランド語」の名詞pullo<ビン>の単数格変化、および「エストニア語」の名詞meri<海>の単数格変化は以下のようになります。」

主格 (nominative)	[〜ガ]
属格 (genitive)	[〜ノ]
分格 (partitive)	[〜ヲ]
対格 (accusative)	[〜ヲ]
内格 (inessive)	[〜ノ中デ]
出格 (elative)	[〜ノ中カラ]
入格 (illative)	[〜ノ中ヘ]
接格 (adessive)	[〜デ/ニ]
奪格 (ablativ)	[〜ノカラ]
向格 (allative)	[〜ヘ]
様格 (essive)	[〜トシテ]
変格 (translative)	[〜ニ (ナル)]
欠格 (abessive)	[〜ナシデ/ニ]
共格 (comitative)	[〜トトモニ]
具格 (instructive)	[〜ニヨッテ]

「左側に掲げた漢字を用いた格表示によって、それぞれの格のおよその意味役割が想像できるかと思います。中には「欠格」などというほとんど病気のような格も存在しますね。それにしてもじつに多くの格の形があるものだと思いますか。ついでにここでまた質問をしましょう。」

〔設問4〕

エストニア語やフィンランド語は、SOV言語/SVO言語のどちらであると推定できるでしょうか。

〔設問5〕

格変化のある言語とない言語では、どちらが学びやすいと思いますか。

以上述べてきましたように、日本語を習得しようという外国人は、我々がすでにほとんど意識しないで用いている「ガ・ノ・ニ・ヲ・ヘ・デ・ト・カラ・ヨリ」という9つの格助詞を使いこなすことがいかに大変であるかあるいはエストニア語のような格変化の豊かな言語に比べると、ドイツ語の4つの格変化はそれほど複雑なものではないということをご理解してほしいと思います。

pullo<ビン>	meri<海>
pullo	meri
pullo-n	mere
pullo-a	merd
—	—
pullo-ssa	mere-s
pullo-sta	mere-st
pullo-on	mere-sse/merre
pullo-lla	mere-l
pullo-lta	mere-lt
pullo-lle	mere-le
pullo-na	mere-na
pullo-ksi	mere-ks
pullo-tta	mere-ta
pullo-ine	mere-ga
pullo-in	

まとめ

以上見てきたように、4つの格変化はけっしてドイツ語固有の複雑さではないということの認識、言い換えれば言語相対性の認識を学生に持たせることが大切である。もちろん、聴講したほとんどの学生は、ドイツ語の格変化は単純なほうであるということが分かったからと言って、すぐに「格アレルギー」という症例(case)を克服できるわけではない。ただ強調しておきたいのは、ドイツ語のもつ格変化をある程度理論的に〔あるいは理屈として〕納得させるかどうかということである。大学一年生の年齢すなわち20歳前後の人間を相手にして「これは何ですか」「それはベンです」式の単純な表現パターンばかりを繰り返していても、決して彼らの知的好奇心には訴えかけない。

ましてや、ドイツ語の授業が、かつて彼らが学んだ、あるいは学ばされた英語のように文法知識の詰め込みのなぞらえであるべきではない。学生はそうした学習の仕方ですでにうんざりしているのである。ドイツ語という外国語を学ぶことの社会的実用性がそれほど叫ばれなくなった現在、大学の教養科目としてそれが存在し続ける意義を見いだそうとするならば、一つは本稿ですでに伏線として提示してきたような形での言語学的な知識を合わせ持つことのできる授業形態がその意義の一端を担うかもしれない。⁶⁾ 確かに表層に置いては、個別言語の文字姿形は異なるけれど、どんな言語も基本的にはサウンド・システムとして共通していて、一見してばらばらに思える文法現象には人間の言語として限りなく共有しうる仕組みが存在していることに気づかせる機会として未修外国語の時空間はまたとない機会でもある。

なお、以上は授業の中でそのまま実施できるシナリオになっているのであるが、授業の後半の時間には、ビデオを用いた視聴覚教材を提示することになっている。以上の説明が視聴覚教材とどのように連動して、学生に納得のいく講義として提示できるかについてはすでに紙数がつきたので、概略のみを紹介するにとどめて次の機会にゆずりたい。

注および補足

1) 本稿の主な内容は、文部省とドイツ文化センター主催の1994年度「夏期ドイツ語教育研修会」〔於：野尻湖〕において、主催者側のスケジュールをわざわざ変更していただいて、ドイツ語のモデル授業として報告したものである。与えられた時間は60分ということで、授業モデルの内容の一部を割愛せざるを得なかったが、聴講して下さった約20名のドイツ語教師からは、大変に好意的な評価をいただいた。また、言語学的な基礎知識を授業の中で活用している先生も何人がおられたことは、筆者の教育方針が、それほど独りよがりでないということの証左ともなって大変心強く思ったものである。ここで、様々な意見を寄せてくださった先生方に感謝申し上げる。

なお、本稿の基本的な趣旨は、以下の研究発表のレジュメに沿っていることを付け加えておきたい。

「第5回新潟大学大学教育開発研究センター教養外国語教育研究部会研究発表会」、平成8年(1996)12月13日、新潟市ニュー越路「私のドイツ語授業—ドイツ語における「格」の習得をめぐる—」

2) SVOはドイツ語の平叙文の語順であるが、SOVは従属文〔副文〕の基本語順として日本語と一致する。ただしこれはドイツ語の内的な必然性によるものではなく、聞き手の注意力を文末までひっぱるという意図を含めて近世において人為的に行われたものである。VSOは、決定疑問文に用いられる。OVSは、文脈依存的にあるいは強調構文において用いられる。

3) 「世界諸言語の語順類型論地図(山本秀樹)」による。

4) いくつかの用例については、大学教育開発研究センターの研究会の席上で、英語担当の佐藤愛子先生が提供して下さったものも紹介させていただく。

5) 「フラット」という意味は、たとえば「助詞」のように文法的に単一カテゴリーの要素で格表示が行われるということで、これに対して「冠詞」と「前置詞」は異なるカテゴリーの要素であり、「冠詞」のみで格表示する仕方と、「前置詞+冠詞」という形で複合的に格表示する仕方の二重性をフラットに対して「階層構造」ととらえている。

6) 「教養課程に言語学を(碧海純一)」1996.

補足：格理解のためのビデオ授業のあらまし

ビデオ授業においては、英語における「格」の消滅の歴史を扱い、それによってなぜドイツ語では格が温存されたかという歴史的原因を理解させる。本論の説明においては、SVO、SOVといった言語のタイプと名詞の文中における役割の明示手段としての「後置詞／前置詞・冠詞」といった要素の現れ方が密接に関係していることを理解した。ドイツ語の格という現象については以上の説明で充分かと思われるが、学生にとってすでに学習の進んだ外国語としての英語と新たに学習するドイツ語の関係について、言語の歴史的側面から考えさせることも学生の知的好奇心に働きかけるといふ意味で有益ではないかと考える。すなわち祖先を同一とする英語とドイツ語において、なぜ英語では格が消滅したのかという歴史的〔通時的〕考察を追加的に行うということである。以下では、ビデオ授業という形での「英語とドイツ語の比較研究」の概略を紹介しておく。

資料：ビデオ授業のための学習教材、イギリスBBC制作「英語についての9章」シリーズ第2回『ブリテン島の攻防』 'A History of English' Vol.2 The Mother Tongue

一学習の目的一

- 1) およそ1,000年前頃まで英語には、現代ドイツ語のように「格変化」が存在していたという事実を紹介する。これは学生には意外性のある事実である。
- 2) 英語では、なぜ格が消滅したのかという理由を探る。
 - ・大陸から移動してきたアングロ＝サクソン人による先住民ケルト人の駆逐
 - ・バイキングの侵入
 - ・ノルマン人の征服
- 3) 文の意味を決定する要因として、格変化と語順の相互補完性を理解する。
- 4) 格の消滅とともに、英語における「前置詞」の役割が重くなったことを理解する。

次に、番組説明テキストの中から、本論のテーマに直接係わると思われる箇所を紹介する。

「古英語(OE: Old English)」に見られる文法現象として、以下原文で続ける」

With overtones of modern Dutch and English, and especially German, Old English has familiar Germanic word like 'cyning' for 'king' and 'sprach' for 'speak'. Anyone who knows modern German will understand the basic principles of Old English and its structural difference from the English we speak today. The Old English for 'the king' is 'se cyning'; 'of the king' is 'thaes cyninge-s'; 'to the king' is 'thaem cyninge'. It's the endings which convey much of the grammar in an inflected language like Old English, not the prepositions. Take a simple Old English sentence like 'the king meets the bishop' - 'se cyning meteth thone biscop'. Here 'se cyning' is the subject of the sentence, 'thone biscop' is the object. It's the form of the words, not word order, which give the sentence its meaning. [訳: 「古英語」で文法上の意味を決めるのは「冠詞」と「語尾」で「前置詞」ではない] In fact if you change the word-order, the meaning of the sentence remains the same. 'Thone biscop meteth se cyning' still means 'the King meets the bishop'.

なお、授業時間にある程度余裕があれば、以下の2つの番組も、言葉に対する関心を喚起するという意味で有益と思われる。

2) 「言葉のルーツを探る」〔教育テレビ〕

インド＝ヨーロッパ祖語を復元する試みを興味深く紹介。

4) 「ことばの不思議」〔教育テレビ〕

①なぜ人間は話せるの／②いつのまに覚えたの／③どうして進化したの-N・チョムスキーが、生成文法の視点から、人間の生得的な言語能力、子供の言語の習得の過程などを興味深く紹介する番組。「言語学に関する教養番組」としてはとても優れたものである。

参考文献

「教養教育におけるアンケート調査報告～ドイツ語未修外国語」のデータを中心として」吉田和比古

『一般教育改善のための新潟大学教養部における調査研究報告書』（一般教育方法等改善4 大学共同研究プロジェクト・新潟大学教養部研究チーム、P.39-53. 1994.

「旧教養部カリキュラムに対する学生の意識調査研究」長谷川彰／竹内照雄／吉田和比古『大学教育研究年報』第1号（新潟大学大学教育開発研究センター）P.131-141. 1995.

「ドイツ語教育の反省点と今後の展望—新潟大学における一般教育改善の試み」吉田和比古（1995）『ドイツ語教育部会会報』第47号 P.51-56. 1995年.

「日英語の鏡像関係」影山太郎 月刊『言語』第12号 P.54-61 1981年。

「言語における鏡像」原口庄輔 月刊『言語』第12号 P.90-97 1983年。

「言語の習得」ルイス・オクサール著 存間進訳 大修館書店 1980年。

「図説英語史入門」中尾俊夫／寺島廸子著 大修館書店 1988年。

「英文『BBC：英語ものがたり』」編注者 菅原光穂 英宝社 1987年。

「英語の歴史」中尾俊夫 講談社現代新書 1989年。

「教養課程に言語学を」碧海純一 月刊『言語』第3号 P.14-19. 1991年及び第4号 P.14-19. 1992年.

「世界諸言語の語順類型論地図」山本秀樹、月刊『言語』第2号 P.13-17. 1996年.